



# 試してみれば良きにつくべし

■ 野村 万蔵



狂言に限らず、日本の無形文化財と称される伝統芸能の多くは、先生の演奏、演技を見聞きすることで自分のものにしていく「口伝」という伝達手法で受け継がれ、今日まで続いてきました。無論、「口伝」と言っても台本が存在しないというわけではありません。和泉流狂言にも台本はあります。ただ、台本を手にするのは、ある程度その世界のことを体得した後のこととなります。私自身も幼い頃から稽古をつけてもらい、中学生になった頃ようやく台本を見せてもらった記憶があります。

さて、その台本の中身はというと情報量としては非常に少なく、ただ文字が書いてあるだけで抑揚も何も分かりません。西洋のクラシック音楽であれば、五線譜の音符による音階やリズム、さまざまな記号や注釈が加えられ、曲をまったく知らなくともある程度再現することができます。比較すると随分と不親切な台本であるにもかかわらず、長い歴史を持ち、受け継がれています。ここに日本の伝統芸能の本質があるように思います。

つまり、伝統芸能の基本となる根や幹の部分をしっかり体に覚え込ませておれば、枝や葉の部分である

■ 野村万蔵  
狂言方和泉流能楽師

1965年生まれ。2005年万蔵家の名跡九世野村万蔵を襲名し当主となる。和泉流職分会代表幹事。重要無形文化財総合指定。伝統と新しいコンテンツとの融合を進めたことによりASIAGRAPH2017において匠（たくみ）賞受賞。



技術，抑揚，間の取り方，演じ方は自分なりの解釈が許されているのです。

私自身も舞台上で映像とコラボレーションをしましたが，新しいものと組み合わせることで本来の舞台では気づきにくい部分を観ている人々にも見せられたと思っています。

さて，今後は伝統芸能の世界もさらに情報量が増えることでしょう。先人は先生の台本を借りて書写し自分の台本としていたものが，現在は先生がパソコン上の台本につけ書き（注釈）を入れ，メールで弟子に送信することもあります。弟子は先生の映像を見ながら稽古をし，自分の動きも映像で確認しながら稽古できます。舞台の再現性は高くなると思いますが，果たして根っこの部分を枯らさずに伝えることに通じるのでしょうか。木々は台風で葉が散ったとしても，根と幹があれば新しい葉がまた生い茂ります。同様に日本の伝統芸能も新しい葉が茂り花を咲かせてほしいと思います。

世阿弥の「试着て良きにつくべし」の言葉通り，進んでいくしかありません。